



# 機械翻訳ポストエディット ガイドライン

一般社団法人アジア太平洋機械翻訳協会  
ポストエディット委員会  
2025年 Ver.1.0



# 目次

目次.....	3
はじめに .....	4
■ 目的.....	4
■ 対象読者.....	4
■ 想定するケース.....	4
■ ポストエディットの目的.....	4
第1章 機械翻訳の処理 .....	5
第2章 最終成果物に求められる品質の理解.....	6
■ 2.1 フルポストエディットの定義と注意点 .....	6
■ 2.2 ライトポストエディットの定義と注意点 .....	7
第3章 作業方針の合意.....	8
■ 3.1 品質仕様書 .....	8
■ 3.2 サンプル翻訳の実施 .....	9
■ 3.3 サンプル集の作成 .....	9
■ 3.4 品質不良の改善（原文・訳文・ポストエディター） .....	10
■ 3.4.1 原文の質に問題があるためMTの出力結果が悪い場合 .....	10
■ 3.4.2 原文の質には問題がないがMTの出力文の質が悪い場合.....	11
■ 3.4.3 ポストエディット作業後の訳文の質に問題がある場合 .....	11
■ 3.5 プロセスフロー .....	13
付録.....	14
■ 翻訳支援（CAT）ツールと機械翻訳の併用.....	14
■ 原文のファイル形式による処理方法の違い（Word/XMLなど） .....	15
■ MTの種類（RBMT/SMT/NMT/LLM）と特長 .....	15
■ RBMT（Rule-based MT） .....	15
■ SMT（Statistical MT） .....	15
■ NMT（Neural MT） .....	16
■ LLM（Large Language Model） .....	16
■ 言語の組み合わせ.....	16
■ ドキュメントの種類（マーケティング文書/マニュアル/Webサイト/UI/その他の文書） ..	17
■ マーケティング文書.....	17
■ 取扱説明書（マニュアル）文書 .....	17
■ Webサイト.....	17
■ ソフトウェアのUI .....	18
■ 医療の各種申請文書、法律文書、特許明細書、技術論文、トレーニングマテリアルなど.....	18



# はじめに

## 目的

この文書は、機械翻訳（Machine translation: MT）の出力結果を確認し修正する業務（ポストエディット / Post-editing: PE）を委託する組織、受託する組織およびPE作業（ポストエディター）が、業務を円滑に遂行するために事前に合意すべきポイントをガイドラインとして提供することを目的としています。

生成AIによる出力結果に対するPEにもご利用ください。

## 対象読者

この文書は、ポストエディット業務の委託組織、受託組織、作業員であるポストエディターを対象としています。

## 想定するケース

本ガイドラインが想定しているのは、以下のケースです。

- 翻訳の言語方向：英語から日本語への翻訳
- ファイルの種類：Word文書
- 機械翻訳の実行：翻訳会社などのポストエディットの受託側

上記以外のケース（日本語から英語へのポストエディットや、Word以外の文書のポストエディットなど）は、後述する付録のセクションで情報提供するものとします。また、日々現場でポストエディットプロジェクトに関わっているAAMT会員から、事例およびケーススタディの情報を提供いただくことを想定しています。

## ポストエディットの目的

機械翻訳（生成AIを使用した翻訳を含む）は、翻訳速度の面では人の処理速度を圧倒しています。ただし、機械翻訳だけでは専門分野や文脈に沿った適切な翻訳を提供できるとは限らず、間違いを起こすリスクが常に存在することを知っておく必要があります。

人の関与によってそうしたリスクを低減し、用途に応じて最適な品質、コスト、納期のバランスを実現すること、言い換えれば、機械翻訳のメリットを最大限に活用することが、ポストエディットの目的です。

多言語化のスピードを優先する場合もあれば、費用の削減を優先することもあります。優先するポイントによっては、想定したサービス品質（品質/コスト/納期のバランス）を実現できないため、機械翻訳をポストエディットするプロセスが適さないケースもあることを理解しておく必要があります。



# 第1章 機械翻訳の処理

本ガイドラインでは、受託する側の組織（例：翻訳会社）が機械翻訳のサービスを利用して翻訳処理を実行するケースを想定しています。受託者は、委託者の要求に合った適切な機械翻訳サービスを選択し、機械翻訳の処理をします。この際、以下のような点について、委託者と受託者の間で合意をしておくことを推奨します。

## （情報セキュリティについて）

- 入力したデータを機械翻訳サービス提供事業者が再利用するかどうか
- 機械翻訳が実行される国や地域
- 機械翻訳サービス提供事業者側がデータを保持するかどうか（保持期間含む）

## （実現可能性について）

- 機械翻訳サービスと対象分野の相性
- 機械翻訳を使うことによって効率化が図れるかどうか
- 機械翻訳サービスが対象言語に対応しているかどうか（英⇒日以外の場合）

## （費用負担について）

- 利用する機械翻訳サービスの料金体系

また、機械翻訳の結果が不正確だと、ポストエディット作業が増えます。機械翻訳の利点を活かすには、修正が少なく済む機械翻訳サービスを選択する必要があります。

## 第2章 最終成果物に求められる品質の理解

ポストエディットは、ISO18587:2017<sup>\*1</sup>で規定されているように、フルポストエディットとライトポストエディットに分類されることがあります。

### 2.1 フルポストエディットの定義と注意点

「フルポストエディット」は、専門の翻訳者による翻訳と同等の品質を目指すプロセスです。ただし、文書の種類や用途によって求められる仕様が異なるため、すべての翻訳またはポストエディットに同じ基準を適用することはできません。

どの要求仕様を対象とするべきなのか、事前のすり合わせを実施して、要求仕様をリスト化して仕様書として合意することが重要です。

委託組織の意向によっては、たとえば、特許の明細書では、請求項を特許審査官に正しく理解してもらうため、読みやすさよりも「正確さ」を優先することがあります。逆に、マーケティング文書の翻訳では、意思決定者に訴求したい内容を適切に伝えることを目的とするため、「流暢さ」を優先するかもしれません。

委託組織の求める品質はケースバイケースで異なるため、「正確さ」や「流暢さ」などを構成する要素を明確にして、ポストエディットで修正する項目について事前にすり合わせておくことが役に立ちます。すり合わせには、Multidimensional Quality Metrics (MQM)<sup>\*2</sup>や、国際標準規格 (ISO)<sup>\*3</sup>のエラータイプを参考にすると効率的です。

翻訳する分野や種類、用途によって、何を修正対象とするのか、どこまで修正するのか、そしてどこまで重視するのかについて委託組織との間で合意しておくことを推奨します。

#### 【参考】

MQMでは、以下のような7つのエラータイプの中に、さらに50を超えるサブタイプがあります。誤訳 (Mistranslation) や訳抜け (Omission) などは、正確性 (Accuracy) を構成する要素であると定義されています (以下、サブタイプは抜粋)。

- (1) 用語 (Terminology) - 指定用語違反、業界用語の不使用、不統一など
- (2) 正確性 (Accuracy) - 誤訳、訳抜け、不要な追加、原文残りなど
- (3) 言語的慣習 (Linguistic conventions) - 文法や句読点のミス、誤字、わかりにくさなど
- (4) スタイル (Style) - 組織および業界のスタイルガイドへの非準拠、不統一、ぎこちなさなど
- (5) 仕向地の慣習 (Locale conventions) - 数字、通貨、尺度、時間、日付の書式の間違いなど
- (6) 想定読者への適切性 (Audience appropriateness) - 読者の文化にそぐわない表現、攻撃的な表現など
- (7) デザインとマークアップ (Design and markup) - 図表のミス、文字長不足、タグ間違いなど

<sup>\*1</sup> 参考文献: ISO18587:2017 (<https://www.iso.org/standard/62970.html>)

<sup>\*2</sup> 参考文献: Multidimensional Quality Metrics (<https://themqm.org/error-types-2/typology/>)

<sup>\*3</sup> 参考文献: ISO 5060 「Translation services - Evaluation of translation output — General guidance」。MQMをベースにして策定された国際標準規格で、翻訳におけるエラーの類型が7つのエラータイプと34のエラーサブタイプに分類されている。

## 2.2 ライトポストエディットの定義と注意点

「ライトポストエディット」は、翻訳者の翻訳と比べて、翻訳処理のスピードを重視してフルポストエディットに含まれる作業項目の一部を省略したり簡略化したりするポストエディットです。たとえば、翻訳文の正確性が担保されていれば、表現の統一は求めないケースや、用語集を参照しないケースなど、要求仕様をできる限りそぎ落としてゆく合意形成が行われます。

どの要求仕様を対象外としてよいのか、どこまで修正するのかについての事前のすり合わせが重要になります。この際、納期や予算の制約をベースにして、できることとできないことを切り分けて仕様を設計することも選択肢です。フルポストエディット時と同様に、要求仕様をリスト化して仕様書として合意することが大切です。

## 第3章 作業方針の合意

作業方針の合意形成にあたっては、以下を準備することを推奨します。

- (1) 対象とする要求仕様を一覧化した品質仕様書
- (2) (1)に基づいて実施したサンプル翻訳あるいはサンプル集
- (3) ポストエディターへの作業指示

### 3.1 品質仕様書

品質仕様書の作成にあたっては、対象となる作業項目を一覧化することが望まれます。

下記にライトポストエディット時のサンプルを提示します。フルポストエディットにおいても、すべての項目が修正対象となるわけではなく、委託組織との間で案件に応じた仕様のすり合わせが必要となります。

※作業項目の一例（MQMの定義を参考に作成）

エラータイプ（大分類） ※追加/削除してよい	エラータイプ（中分類） ※追加/削除してよい	PE 修正対象
正確性 (Accuracy)	誤訳（Mistranslation）	○
	訳抜け（Omission）	○
	不要な追加（Addition）	○
	原文残り（Untranslated）	○
言語的慣習 (Linguistic conventions)	文法間違い	○
	句読点の用法間違い	×
	わかりにくい表現	×
	誤字	○
用語 (Terminology)	指定用語集への非準拠	指定なし
	業界用語の不使用	○
	用語の不統一	×
スタイル (Style)	指定スタイルガイドへの非準拠	提供なし
	業界のスタイルへの非準拠	×
	スタイルの不統一	×
	ぎこちないスタイル	×

仕向地の慣習 (Locale conventions)	数字・通貨の書式間違い	○
	尺度の間違い	○
	時間・日付の書式間違い	○
	住所・電話番号の書式間違い	×
	固有名詞の調査	×
想定読者への適切性 (Audience appropriateness)	文化的に不適切な表現	×
	攻撃的・誹謗中傷的な表現	×
デザインとマークアップ (Design and markup)	図表の間違い	×
	タグの間違い	×
	文字長の過不足	×
	相互参照	×
その他		

## 3.2 サンプル翻訳の実施

品質仕様書に作業対象項目を落とし込んだら、受託組織は先行して少量ポストエディットを実施し、成果物を委託組織に提示してターゲットとなる品質基準に齟齬がないかを確認します。

## 3.3 サンプル集の作成

継続的な案件の場合、過去のポストエディットに基づきサンプル集を作成すると、どの項目をどの程度まで修正するかについて、ポストエディターに明確なイメージを持ってもらうことができます。

※以下はサンプル集の一例です。具体的な方針は、プロジェクトに合わせて委託組織と受託組織の間で取り決めてください。

### 英日のサンプル集

方針	原文	MT 訳文	ライト ポストエディット	(参考) 人手翻訳
<b>スタイル (Style)</b> 記号の全角/半角、長音(ユーザ/ユーザー)の修正はしません。	This SLA is part of end user service agreement (EUSA) for covered services ("Services").	この SLA は、対象サービス（「サービス」）のエンドユーザー サービス 契約（EUSA）の一部です。	この SLA は、対象サービス（以下、「サービス」）のエンドユーザー サービス 契約（EUSA）の一部です。	この SLA は、対象サービス（以下、「サービス」）のエンドユーザー サービス 契約（EUSA）の一部です。
<b>言語的慣習 (Linguistic conventions)</b> 読みやすさの修正はしません。	The wizard guides you through creating the connection.	ウィザードでは、接続を作成できます。	ウィザードでは、接続を作成できます。	ウィザードの指示に従って接続を作成します。
<b>仕向地の慣習 (Locale conventions)</b> 固有名詞 (Michael Johnson, ABC Browser) の調査はしません。	Thanks to some great work of Michael Johnson, you can try an alpha version of ABC Browser right now.	マイケル・ジョンソンの素晴らしい仕事のおかげで、今すぐ ABC ブラウザのアルファ版を試すことができます。	マイケル・ジョンソンの素晴らしい仕事のおかげで、今すぐ ABC ブラウザのアルファ版を試すことができます。	Michael Johnson の優れた仕事のおかげで、ABC Browser のアルファ版を今すぐ試すことができます。

## 3.4 品質不良の改善（原文・訳文・ポストエディター）

ポストエディット作業時に発生する問題の種類には、原文の質に起因するもの、訳文の質に起因するもの、ポストエディターに起因するものなどが考えられます。問題が発覚した時点で速やかに対策を講ずることで、サービス品質の向上が期待できます。

### 3.4.1 原文の質に問題があるためMTの出力結果が悪い場合

原文の質が悪いことが原因でMTの出力結果が悪くなった結果、ポストエディット作業の負荷が高くなることがあります。この場合は、ポストエディット作業を開始する前に、原文を修正して再度MT処理を実施するかどうかを委託組織と受託組織で検討します。原文に対しては、以下のような対策を実施することが考えられます。

- (1) 原文で使用されている用語の統一
- (2) 主語・係り受け関係の明確化
- (3) 書式（数値/日付/尺度など）の修正
- (4) MTの使用自体の中止

### ■ 3.4.2 原文の質には問題がないがMTの出力文の質が悪い場合

MTの出力文の品質が悪いため、合意した作業に想定以上の負荷がかかる場合は、MTの使用自体の中止、あるいはMTの出力結果を自動修正することを検討します。この場合、受託組織が対策を検討する必要があります。

できるだけ質の悪い出力文を減らすように、MTでの処理の仕方を改善するか、出力された翻訳に対して一括置換や自動校正ツールなどを活用して修正をするなどの対策を実施します。

**MTでの処理に関しては、以下のような対策を実施することが考えられます。**

- (1) MT自体の変更
- (2) MTのカスタマイズ
- (3) 訳文で使用されるべき用語集の指定とMT出力への適用

**MTの出力結果に対しては、以下のような対策を実施することが考えられます。**

- (1) 訳文で使用されている用語や表現を統一する処理
- (2) 文書校正ツールなどを使用した修正

### ■ 3.4.3 ポストエディット作業後の訳文の質に問題がある場合

この場合、以下の関係者の間で対策を検討する必要があります。

1. 委託組織と受託組織の間
2. 受託組織とポストエディターとの間

ポストエディット作業後の訳文に問題がある場合は、再作業で適切な修正を施すかを決定します。一方で、次回以降の作業で同様の問題が発生しないよう、根本的な原因について利害関係者を交えて議論することが大切です。

この場合、委託組織、受託組織、ポストエディターが一堂に会した形式で議論できることが望ましいですが、実現が難しい場合は業務を受託した組織が、主導的役割を担い、委託組織とポストエディターの間を仲立ちしてコミュニケーションを図ることが重要です。例えば根本原因分析（Root Cause Analysis : RCA）では以下の点を聞き取ります。

- (1) 前述「3.4.1」あるいは「3.4.2」で解決できることはなかったか
- (2) 要求仕様に不明瞭な点はないか
- (3) 要求仕様を鑑みて、ポストエディターの許容量を超えた発注がなされていないか
- (4) 要求仕様を鑑みて、適正な単価で依頼されているか
- (5) ポストエディターに提供した作業指示/手順に不明瞭な点はなかったか
- (6) 使用するツールや環境に問題はなかったか
- (7) 適切にナレッジの共有（教育）がなされているか
- (8) ポストエディターの力量に問題がなかったか
- (9) 要求仕様に適合しているかどうかの確認作業（ポストエディター/受託組織）に問題はなかったか
- (10) 納品前に確認できる事項はなかったか

その上で、以下のような対策を実施します。

**短期的に納品物に対して実施する対策（緊急是正措置）**

RCA（根本原因分析）で見つけた原因を最大限斟酌し、再作業の内容について合意した上で対策を実施します。その際、依頼時に含まれていなかった要求仕様については、追加作業としての作業を検討します。

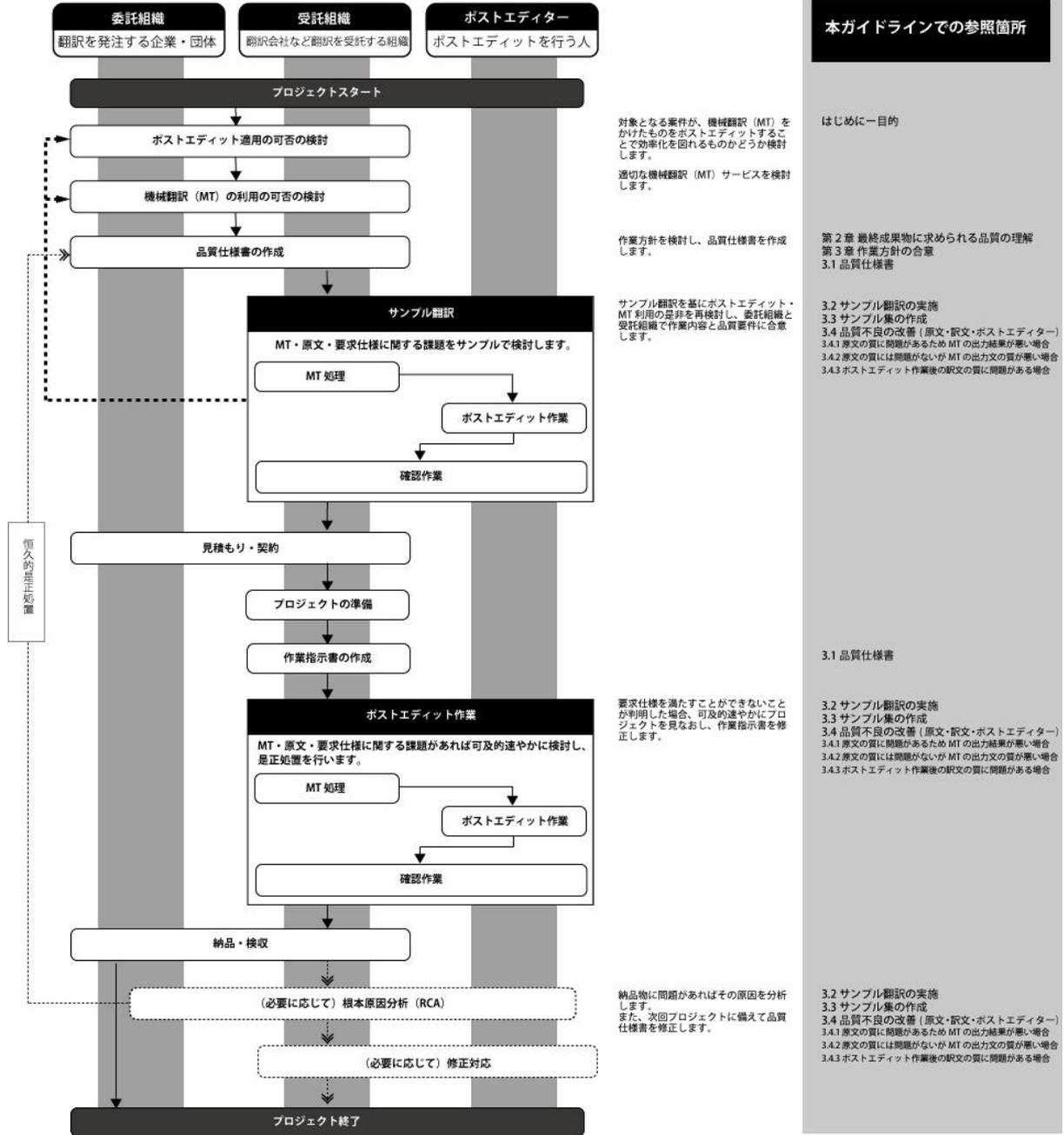
また、ポストエディターの力量に問題があると認識した場合は、ポストエディターに対してトレーニングを実施するか、ポストエディター自体を変更して修正作業を実施します。

**次回以降の案件に実施する対策（恒久是正措置）**

RCAで見つけた原因を是正し、プロセスを再設計します。新たなプロセスでポストエディット作業を実施した後に、RCAで洗い出された項目および前回のフィードバック項目について、是正されているかどうかを確認します。

## 3.5 プロセスフロー

以下に、ポストエディットを伴うプロジェクトのフローを例示します。



# 付録

## ■ 翻訳支援（CAT）ツールと機械翻訳の併用

ポストエディットのプロジェクトを遂行する際に、MTと翻訳支援ツールを併用して翻訳処理するケースもあります。

翻訳支援ツールは、過去の翻訳を再利用することで、翻訳作業を効率化するツールです。MTは、ゼロから翻訳する点が翻訳支援ツールと異なります。翻訳支援ツールでは、過去の原文と完全に一致している箇所（＝100%マッチなど）、部分的に一致している箇所（＝ファジーマッチ）などを分類できます。

翻訳支援ツールとMTを組み合わせるプロセスは、一定の一致率（一般的には75%）を上回る文には過去の訳文を活用し、それ以外の文に対してはMTでゼロから翻訳するといった方法を取ることで、ポストエディット作業の負荷を低減することができます。

本ガイドラインでは対象にしていますが、翻訳支援ツールの使用には以下のようなメリットがあります。

- 過去の訳文を翻訳メモリというデータベースに保管することで、訳文の再利用が可能
- 用語集や校正機能などを備えているため、品質保証にも役立つ
- 主要な機械翻訳サービスとすでに連携しているためポストエディットを即開始できる
- 主要なファイル書式<sup>5)</sup>に対応しており、レイアウトを維持した作業が可能

主要な翻訳支援ツールを使用したポストエディットプロジェクトの事例紹介やケーススタディについて、寄稿を募集しています。

**お願い：**

**主要な翻訳支援ツールを使用したポストエディットプロジェクトの事例紹介やケーススタディについて、寄稿を募集しています。**

<sup>5)</sup>主要なCATツールでは、Microsoft Office アプリケーション（Word/Excel/Power Point）のほか、Adobe InDesign、マークダウン、XML、HTMLなどのマークアップファイルにも対応するものが多い

<sup>6)</sup>ICE マッチ=In-Context-Exactマッチ

## ■ 原文のファイル形式による処理方法の違い (Word/XMLなど)

ファイル形式によっては、前述した翻訳支援ツールを使用することが有効です。主要なファイル形式を変換し、レイアウトを維持した状態でポストエディット作業の結果を反映することができるためです。

お願い：

多様なファイル形式に対するポストエディットプロジェクトの事例紹介やケーススタディについて、寄稿を募集しています。

## ■ MTの種類（RBMT/SMT/NMT/LLM）と特長

### ■ RBMT (Rule-based MT)

翻訳規則を1つ1つ人間が記述し、規則を複数組み合わせることで翻訳を行う。規則に完全に合致する入力文については100%の精度で翻訳できるが、そうでない場合には誤訳、不自然な訳が出力されたり、そもそも翻訳が不可能なこともある。翻訳規則を完全に網羅することが不可能なため、翻訳できる文の範囲は狭い。言語が変わると翻訳規則を1から作り直す必要があるため、拡張性が乏しい。また、いかにも機械翻訳といった不自然な訳文になることが多い。一方で、なぜこの翻訳文が出力されたのかを完全に説明することができるため、翻訳規則を追加・修正することで以降の翻訳における誤訳の修正を行うことが可能。

### ■ SMT (Statistical MT)

まず、同じ内容を2つの言語で表した文のペアの集合（＝対訳コーパス）から事前に翻訳知識を自動的に学習しておく。新たな入力文を翻訳する際には、入力文をいくつかの単語列に分解し、各単語列に合致する翻訳知識を確率的に組み合わせることで翻訳を行う。対訳コーパスの量を増やせば増やすほど翻訳知識が増え、翻訳性能も向上する傾向にある。翻訳知識が不足していたり、組み合わせ方がうまくいかなかったりした場合に、人間が見て一目でわかるような明らかな誤訳を出力する場合がある。対訳コーパスさえ用意すればどの言語でも同じ方法で翻訳が行えるため、拡張性が高い。なぜこの翻訳文が出力されたのかは、どのような翻訳知識が学習され、どのように組み合わせられたのかを調査することで説明は可能。ただし、翻訳プロセスは確率的に行われるため、誤訳があったからといって、その誤訳が以降の翻訳で絶対に発生しないように修正することは基本的には不可能。

## ■ NMT (Neural MT)

ニューラルネットワークという機械学習の手法を用いて翻訳が行われる。SMTと同じく、対訳コーパスを用いてニューラルネットワークの訓練を行うが、ここで学習されるのは翻訳知識ではなく、ネットワーク内の重み（パラメーター）である。よって、どのような翻訳知識が学習されたのかは説明できないし、翻訳結果が出力される過程も一切説明できない。よってピンポイントの誤訳の修正も不可能。翻訳知識を組み合わせる方式とは異なり、文としての自然さが非常に高い。また文を単語レベルで扱うのではなく、文全体を解釈してから翻訳を行うため、入力文の表記の揺れやタイポなどに頑健で、柔軟に翻訳を行うことができる。一方で、誤訳があった場合に気づかない可能性があるという問題もある。入力文に書かれていないことを出力する「湧き出し」と呼ばれる現象が起きることもある。

## ■ LLM (Large Language Model)

NMTと同じく、ニューラルネットワークを用いているが、その構造はNMTとは全く異なる。LLMはそもそも翻訳のために作られたものではなく、たまたま翻訳の能力も備えているだけであることに注意が必要。詳しくは述べないが、学習の方法もNMTとは全く異なり、基本的には対訳コーパスは用いない（用いても良い）。LLMは入力に対して自然な応答を返すように学習されているため、翻訳を行う場合でもその自然さはNMT以上である。またかなりの長文を一度に翻訳することもでき、前後関係なども考慮しつつ翻訳を行うことが可能。どのようなスタイルの翻訳を行いたいかといったコントロールもある程度行える。ただし、翻訳のために作られたものではないため、たとえば入力文のうちの1文丸ごと訳文から抜けていたり、部分的に抜けていたり、入力文を勝手に解釈して異なる表現で翻訳したり、書かれていないことを出力したりといった問題が起こることもある。

## ■ 言語の組み合わせ

本ガイドラインでは、英日方向のポストエディット作業を対象としていますが、様々な言語方向でポストエディットプロジェクトを実施することが可能です。言語の組み合わせによっては、ポストエディットをできるレベルの機械翻訳サービスが提供されていないことや、ポストエディターが不足する組み合わせもあるため、それぞれ受託前に実現可能性について検証をすることが望まれます。

### お願い：

多様な言語の組み合わせに対するポストエディットプロジェクトの事例紹介やケーススタディについて、寄稿を募集しています。

## ■ ドキュメントの種類（マーケティング文書/マニュアル/ Webサイト/UI/その他の文書）

本ガイドラインでは、特定の種類のドキュメントをポストエディットすることは想定していません。ただし、前述したとおり、ドキュメントの種類によっては、要求仕様は大きく異なります。また、ドキュメントの種類の違いは原文のファイル形式のほか、デザインやマークアップの違いにつながることも多いため、個別の仕様のすり合わせを行うことを推奨します。

### ■ マーケティング文書

Microsoft OfficeアプリケーションやG-Suiteなどビジネスアプリケーションを使用して作成することもあります。Adobe社のInDesignやIllustratorなどを使用したり、SNSに投稿する目的で画像や動画を翻訳したりすることが必要になることもあります。マーケティングのキャンペーンによっては、トーンやマナーも大きく変化しますので作業の方針を事前にすり合わせることが重要です。

### ■ 取扱説明書(マニュアル)文書

ドキュメントを構造化することで自動組版し、HTML、EPUB、PDFなどにマルチパブリッシングするために、CCMS<sup>7</sup>といったシステムが利用されます。CCMSは、情報をコンポーネント化して統合的に管理するシステムです。大規模な技術文書やマニュアルの作成・管理・配信など、ドキュメントの構造化に適しています。この場合、機械翻訳を適用するには、お使いのCCMSと連携した翻訳支援ツールの利用が効率的です。要求仕様の合意に際しては、マークアップ（あるいはそれに起因する）の間違いを想定したすり合わせが重要です。

<sup>7</sup> Component Content Management System の略称。Adobe FrameMakerやMadCap Flareなどのマニュアル文書の作成に多用されるもののほか、DITAに対応したCCMSもあります。

### ■ Webサイト

CMSといったシステムが利用されます。Web CMSとも呼ばれ、Webページの作成・編集・管理を行うシステムです。HTMLなどのWeb専門知識がなくても、簡単にホームページを作成・更新することができます。この場合も、お使いのWeb CMSと連携した翻訳支援ツールの利用が効率的です。要求仕様の合意に際しては、マークアップ（あるいはそれに起因する）の間違いを想定したすり合わせが重要です。

## ■ ソフトウェアのUI

Webアプリケーション、組み込みソフトウェア、モバイルやPCにインストールするようなネイティブアプリなど、種類によって編集の仕方や機械翻訳の適用の仕方が異なります。また、こうしたUIの翻訳に際しては、実際の画面上での表示を確認できる環境を構築することができると、入力長や変数の表示が正しく行われるのか、またはメッセージダイアログとボタンの訳し分けなどを確認できます。また、Gitリポジトリとの連携が主流であるため連携できるツールを使用することが大切です。

## ■ 医療の各種申請文書、法律文書、特許明細書、技術論文、トレーニングマテリアルなど

翻訳対象物には様々な種類のドキュメントがあります。こうした文書のほとんどは、Microsoft OfficeアプリケーションやG-Suiteなどのビジネスアプリケーションで作成されていますが、それぞれに適した書式やトーン、専門用語、スタイルなどがあるため、要求仕様の合意に際しては、個別にすり合わせることを推奨します。

**お願い：**

多様なドキュメントの種類に応じたポストエディットプロジェクトの事例紹介やケーススタディについて、寄稿を募集しています。

**改訂歴**

版番号	改定日	改訂内容
初版	2025.07.24	新規制定
第2版		

**制作者について**

一般社団法人 アジア太平洋機械翻訳協会  
AAMT内 ポストエディット委員会

**ポストエディット委員会 委員一覧（敬称略）**

安達 久博 株式会社サン・フレア / AAMT 理事  
荒木 慎太郎 株式会社カルテモ  
石川 弘美 株式会社十印 / AAMT 理事  
上田 有佳子 ネットアップ合同会社  
大村 雅之 MSD 株式会社  
佐藤 美帆 SAP ジャパン株式会社  
隅田 英一郎 国立研究開発法人情報通信研究機構  
中澤 敏明 東京大学 / AAMT 理事  
松永 朱子 シーメンス EDA ジャパン株式会社  
室田 陽子 株式会社アメリカ・ネットワーク / AAMT 理事  
森口 功造 株式会社川村インターナショナル / AAMT 理事

**著作権**

本ガイドラインの著作権は、一般社団法人アジア太平洋機械翻訳協会（AAMT）が保有しています。  
Copyright ©2025 Asia-Pacific Association for Machine Translation (AAMT)

**利用許諾**

機械翻訳ポストエディットガイドラインは、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス「表示 - 改変禁止 4.0 国際（CC BY-ND 4.0）」の下で利用が可能です。

同ライセンスの要約：<https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/deed.ja>

**免責**

本ガイドラインおよび関連文書は現状有志で提供され、アジア太平洋機械翻訳協会（AAMT）は、その正確性や使用について一切の保証をいたしません。これらの文書には、誤りや不正確な情報が含まれる可能性があります。AAMTは、事前の通知なくこれらの文書の記載内容を変更する権利を有します。